



JEACS

福音讚美歌 ジャーナル

2022.7 vol.33

ハイパーリンク付 PDF版



CONTENTS

Page

賛美歌学的に見た忠さん	井上義	1
撮影スタッフから見た小坂忠師の 信仰者としての姿について	大嶋英知	4
本の紹介『ウルトラ音楽術』	中山信児	6

Japan Evangelical Association
for Congregational Singing

■ 賛美歌学的に見た忠さん

井上義 (元 福音讚美歌協会 賛美歌委員)

2022年7月の時点で「小坂忠」の名をネットで検索すると、日本のロックミュージック／ポピュラー音楽の世界における彼の功績をそれぞれの視点から書き綴ったその道の大家たちによる文章が、そこかしこに溢れています。日本のポピュラーカルチャーの世界にここまで鮮烈な足跡を残した日本人のクリスチャン・シンガーはいなかったのではないのでしょうか。しかも、諸々のシンガーとしての功績・ラベリングと並んで、いやそれ以上に、まず牧師でありゴスペルシンガーであったという肩書きが堂々と記されているのが、とりわけ宗教を警戒する日本のマスコミの風土にあっては、特異な例として際立っています。しかし召された今、忠さんがやってきたことを振り返って考えると、その歩みは過去50年における「キリスト教ポピュラーカルチャーの金字塔」であったと言えるでしょう(本人がそのような呼称を望んでいたとは思えません)。

教会内でも皆から「忠さん」と呼ばれていたと思うので、ここでも無礼講でそう綴らせて頂きますが、筆者はリアルタイムでは、残念ながら世代的に忠さんの初期の「日本のロックシンガーの草分け」としての顔を知りません。同じような状況の人たちは、2006年の段階での忠さん自身の手による自伝『まだ夢の続き』(2006)を手にとってみられる事をお勧めします。また忠さんの個々の作品のメッセージや背景についてはYouTubeの「小坂忠 / Chu's Cafe [Episode]」にて、2022年5月の段階で50本ほどの動画メッセージが見られ、文字通り本人の声と本人の歌とによる、歌に託されメッセージが体感できます。これらの動画も、歴史的人物小坂忠を知るための資料としては一級品です。忠さん、晩年の大変な時期に、よくぞこういう後代に残る貴重な資料を形にしておいてくれたことを、感謝します。

さて、忠さんの55年に及ぶ音楽活動の場ですが、便宜上、①世俗(1966～76)、②混在(1976～78)、③教会(1978～2000)、④ハイブリッド [=融合](2000-2022)と、次期的に区分して見ることができるでしょう。②は受洗(1976)をきっかけとした時期、③はミクタム社の設立(1978)に始まる時期です。この③の時期には、様々な規模の賛美集会、礼拝賛美のための楽譜や音源のリリース、賛美・礼拝セミナーの開催、

等が本格化します。それによりおもに福音派・カリスマ派の文脈で、クリスチャン・シンガー／賛美リーダー／音楽牧師(1991年、日本フォースクエア福音教団牧師就任)として、忠さんのプレゼンスは広く認知されるに至ります。またこの時期の後半には、種々の大規模賛美集会を積極的に推進されています。続く④の時期には、③の時期に培われた日本のコンテンポラリーな賛美と礼拝の実践／指導／ネットワークの拡大を基本としつつも、今や世俗の世界では大御所となっている①の時代の仲間達との旧交を温める種々の音楽活動が復活しました。

以下、2022年の段階の目線ですが、忠さんの日本の教会音楽／賛美歌学におけるの働きの意義について、筆者はそのエッセンスを「開拓、橋渡し、和解」と表現しようと思います。その上で、これらは、1. Sacred & Secular [教会とこの世]、2. Professionals & Common People [専門家と会衆]、3. Among Christians [教会内]という三つのフェイズにおいて、妥当性を有するものと考えます。

1. Sacred & Secular [教会とこの世]

上に記しましたように、世の中のポピュラーミュージックシーンにおける。とりわけ日本のロックミュージックの黎明期における忠さんの功績は、死して尚「レジェンド級」と評されている事は間違いありません。様々な追悼特集の記事を読むたびに、そこまで凄い人だったのかと、私自身痛く感じ入った次第です。特に信仰を持つに至る前の最初の10年近い時期の活動や作品には、信仰的なモチーフはほとんど見られませんので、まさしく新時代の世俗のヒーローであったと言えるでしょう。しかしそこから回心を経て、教会という現場における、とりわけ若い人たちの現実と結びつくような音楽の実態が欠落しているのを目の当たりにし、あるいは疑問を持ち、人々の期待を感じ、やがてそれをライフワークにしようと思うに至ったようです。よって、上記③教会(1978～2000)に集中した活動期の忠さんは、ほんとにその間の世俗の音楽の動きを「知らなかった」ようです。筆者が初めて忠さんとコンタクトを取ったのは1999年の夏でしたが、そこで世俗の音楽についていくつか問いを發しましたところ、忠さんは「僕は今もうセクラーな音楽の世界の事はまったく知らないからわかんなくてね」と、笑いながら言っておられたのが印象的でした。しかし、忠さんの地上での生涯が2000年までで終わっていたならば、そこから20年以上を経たこの度の逝去の出来事に対して、世の中はここまで反応しなかったことでしょうし、また忠さんの働きがSacred & Secularをつなぐ架け橋というような意味合いは、あまり感じられなかったのではないかと思います。いろんな経緯を経ての事かとは思いますが、2000年以降の忠さんの活動のフィールドは、世俗限定でも教会限定でも無い、両者に本格的に根を下ろそうとするかのような、言わば聖と俗との「融合」の試みの時期であったように感じます。世俗の側では「レジェンドが帰ってきた!」といった歓迎モードの言説があちこちに見られ、しかしまた同時にミクタムをベースとした教会内での礼拝と賛美の実践、教育、出版活動も、90年代に見られたような大規模集会こそ減少したものの、決して手薄になったというわけではなかったように感じます。忠さんの作品である「勝利者」は世俗のテレビ番組でも取り上げられた事もありますし、最後の世俗作品ともいえる「まだ夢の途中」は、世俗の文脈で書かれたものであるにも関わらず、忠さんが書いたテキストと知ると、その背後には様々なニュアンスが、信仰の「香り」が、薄っすらと感じられるのではないのでしょうか。

鈴木茂氏とのユニット「茂忠」の「[まだ夢の途中](#)」などは、信仰の歌と言うには、一般的すぎるきらいもあるでしょうが、牧師がギター片手に、人生半ばを過ぎた人たちに歌っている歌と思うと、やはり信仰に裏付けられたメッセージを感じてしまいます。キリストも十字架もなくとも、信仰に立って人生を振り返る言葉の力強さとも言えますか。世の中との断絶ではなく、ポイントオブコンタクトを重視する、宣教学的な視座を重んじるなら、「これも賛美歌」と言えるものでしょう。そのような忠さんの様々な形での教会の歌と世俗の歌の境界線上での「開拓、橋渡し、和解」の試みについて、筆者は大きな意味を見出します。

2. Professionals & Common People [専門家と会衆]

専門家が技術に磨きをかけると、高度に洗練されるが、その結果時として専門家は会衆から遊離してしまう。これは、いつの時代にも繰り返される、教会音楽史における古くて新しい、重要課題です。コンテンポラリーなタイプのキリスト教音楽においては、プロのシンガーによる複雑かつ洗練されたCCM(Contemporary Christian Music)と、会衆賛美のためのシンプルさを要とするCWM(Contemporary Worship Music)の二種がジャンルとして存在します。忠さん、そしてミクタムの活動は、CCMとCWM

の区別意識を堅持しつつも、双方に資する作品や楽譜の提供に努力を重ねてきました。それは現在のミクタムのホームページ上でのラインナップもまず「Worship」があり、次に「CCM」が来ているところからも見て取ることができます。クラシックで言えば、例えばテゼ共同体の賛美もそうですが、会衆をリードする専門家／ソロ集団の訓練と高い専門性とがなければ、より良い専門家／会衆の賛美の融合は実現しません。コンテンポラリーの世界においてはバンドやソングリーダーの訓練がこれに該当するため、礼拝や賛美の指導者やリーダー育成に、忠さんは常に邁進してこられました。これもまた忠さんが注力された賛美における「開拓、橋渡し、和解」の試みであったと言えるでしょう。

3. Among Christians [教会内]

第三の点は、教会内の礼拝と賛美における和解の務めとでも言えるものです。Worship Warsという言葉があるように、残念ながら賛美のスタイルやモードについての理解や実践の違いは、豊かな多様性の表れと理解される以上に、鋭い「対立軸」とみなされることがしばしばです。とりわけ20世紀後半のコンテンポラリースタイルの礼拝や音楽においては、伝統的なクラシック陣営からの批判の矢がコンテンポラリー陣営には放たれた形跡が随所に見られます。妥当な言説も中には含まれてはいるものの、感覚的あるいは無責任な心無い批判の声も、多々含まれていたことは、過去の批判の言説を今、冷静に観察すると明らかであるとも言えます。

一つには、[ミクタム](#)のラインナップを見てください。日本人のクラシック演奏家の教会音楽演奏も多数ですが、何気に鈴木雅明氏とバッハ・コレギウム・ジャパンのジュネーブ詩篇歌であるとか、今仲幸雄氏の独唱集であるとか、世界レベルのクラシック演奏の貴重な音源も独自の企画でリリースしています。忠さん、そして奥様でプロデューサーのこうえいかさんとお話ししていつも感じるのは、彼らの側にはクラシックや他のジャンル、あるいは他のレーベルや出版社に対する対立の意識はまったくと言ってよいほどに無いという事。2000年の沖縄での日本伝道会議は、「和解の福音」をテーマとして掲げていました。その賛美を巡る分科会においてどのような企画をもっていか、という問いと取り組む中、それこそ、賛美こそがまさしく「和解」をテーマとすべきで無いか？と筆者は提案しました。それでは言い出しっぺが適材を探してくださいと言われましたので、コンテンポラリー陣営に関しては迷わず忠さんをお願いしました。それ以前にインタビューした際に、忠さんの言説からはそういった他の伝統・スタイルに対する敵対心というもの全く感じられなかったからです。そして期待通り、忠さんは、控えめに空気を読みながら、無事「和解の務め」の一部を果たしてくださいました。また、90年代に福音派におけるコンテンポラリースタイルの賛美の浸透に重要な役割を果たしたいのちのことば社発行の「リビングプレイズ」シリーズは、ミクタムのこうえいか氏をプロデューサーとした企画であり、ミクタムとことば社が(陰ながらでしたが)協力しつつ、日本の福音派諸教会の礼拝と賛美に新しい時代をもたらすものでした。筆者は、70年代から80年代における日本の福音派の礼拝と賛美を巡るWorship Warsに、解決の兆しをもたらした決定要因は、「リビングプレイズ」という目に見える成果を残したミクタムとことば社の協力であったと見ています。

このような教会内における忠さんの、密かなとも見える平和の思いは、教会をイメージした「[神の家族](#)」の歌詞に顕著のように感じます。一見ロマンティック言説の賛美の歌と感じられるかもしれませんが、教会内における、さまざまな困難やぶつかり合いにつける第一の特効薬は、兄弟愛であると聖書も語っているわけですから。クラシックの耳からすると、時として激しいロックなサウンドや大音量も伴う忠さんのコンテンポラリーな賛美と礼拝のサウンドでしたが、しかし目指すところは、神との和解、世との和解、そして神の民の間での和解であったのだと感じます。そのための開拓、橋渡しに投じられた、尊いその生涯とお働きに感謝をもって。





■撮影スタッフから見た小坂忠師の信仰者としての姿について

Wisdom CRS 大嶋英知

最後のライフワーク

私は、コロナ禍になってから、多くの映像制作に携わらせていただいています。故小坂忠先生が最後のライフワークとして制作されていた「M Worship Project」の賛美映像もその一つでした。2020年の10月、軽井沢「恵みシャレー」にて、「M Worship Project」は始まりました。コロナ禍で多くの教会が礼拝で賛美できない中、少しでも役に立てればと始まりました。小坂忠先生を中心とするM Worshipは、約15分の動画をひと月ごとに希望のある教会へDVDまたは動画URLを提供して、無料で賛美の時間に使っていただくための賛美映像です。

撮影初日は、それぞれ別分野で活躍されている演奏者とスタッフが一つになって新しいことを始めるので、とても緊張感がありました。まずは忠先生が聖書をを開き、みことばを共有してメッセージを語ってくださり、それからリハーサルが始まりました。そして現場監督が収録開始の合図で「テイクワン」と言ってカチンコを鳴らした瞬間、忠先生は「ウッ！」と唸りながら脇腹を手で押さえ、銃で打られたようなリアクションで、一同を驚かせました。それまで緊張感でいっぱいだったその場の空気が一気に和み、演奏者・スタッフの表情にも笑顔が見えるようになりました。

演奏のスタイルは、忠先生が演奏者・賛美者とアイコンタクトを取りながら賛美をしたいとのことで、円を描くような形で行いました。撮影側としては色々な映り込みがあるため大変ではありましたが、演奏者・賛美者への細やかな意思疎通をととても大切にされていたのだと、のちの映像編集の際に改めて気付かされました。2回目の収録からは、東京都足立区 神の家族イエス・キリスト教会にて撮影が行われました。忠先生は足の大きな手術を終えたばかりで、杖を片手に参加されていて、とても大変な時期だったと思いますが、休憩時間にドラムを叩きながら「リハビリだ」と笑顔で言っている姿がとても印象的でした。

収録前には、ミュージシャンの方と雑談したり冗談を言ったりしていましたが、本番になった瞬間にスイッチが入り、心の照準が主へ向けられ、ミュージシャン・コーラスメンバーと的確なジェスチャーで賛美リードし、曲の終わりに天におられる主を見上げ「アーメン」と唱えるその姿は、真の賛美者であり礼拝者で、映像編集をしている時にも、何度も胸が熱くなりました。

ミクタムの事務所で次のM Worship収録に向けてスタッフの打ち合わせをした時がありました。打ち合わせの帰り際に、忠先生に声をかけていただき「これが俺の遺影になるから、かっこよく頼むよ！」と言われました。その時は、“まだまだこれからも続けていって欲しい”という思いでしたが、収録後に映像編集をしていく中で、“もしかしたらこれがラストワークになるかもしれない”、という気持ちになり、いつでも悔いの無い編集をしていかなければと改めて思わされました。「次もある」ではなく「これがラストチャンスだ」と情熱をもって真摯に取り組むことの大切さを、忠先生の賛美する姿から教えていただきました。

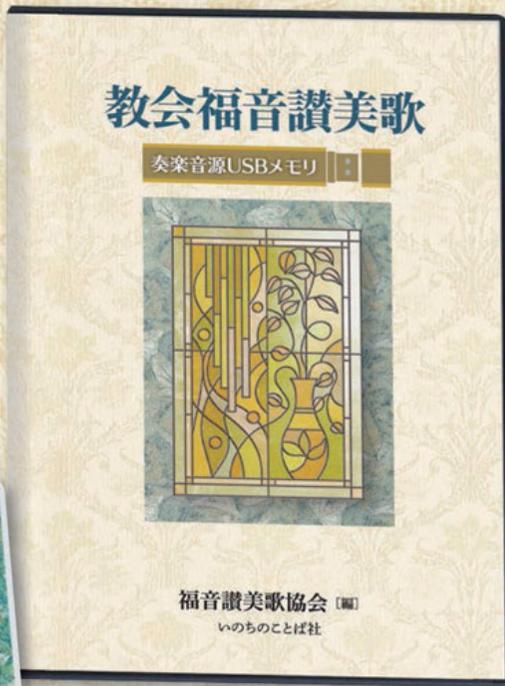
地上で残された僅かな時間を、全身全霊主への賛美にかけた賛美者、小坂忠先生の想いを少しでも引き継いでいけたらと日々思っています。小坂忠先生最後のライフワーク「M Worship Project」の映像が、多くの教会でこれからも賛美に用いられますように、心から祈っております。

M Worship Project サンプル視聴 <https://www.facebook.com/m.worship.project>

M Worship Project 1～12までの賛美映像配信、又はDVD(無料)のお申し込みは随時受付中です。お申し込みの際には 1)所属教会名 2)担当者名 3)URLによる配信希望、もしくはDVD 郵送希望(DVD希望の方は郵送先ご住所、電話番号を添えて)を記載のうえ、M Worship Project 事務局までご連絡ください。メール：m.worship.project@gmail.com



奏樂者による演奏で、
全曲のメロディーがわかる！



福音讚美歌協会 編
いのちのことは社

※データ形式：MP3
制作 福音讚美歌協会 発売 いのちのことは社

『教会福音讚美歌』
『あたらしい歌2』の
526曲の音源を収録

数量限定
生産

『教会福音讚美歌』刊行10周年記念企画

2022年8月入荷 9月発売予定

定価 39,600円(税込)

発売記念特価 36,300円(税込) 2022年12月末日まで

(JEACSの正会員教会、賛助会員には会員特価がございます。詳しくは [JEACS](#) までお問い合わせください。)

[視聴はこちら](#)
[収録曲一覧](#)

本の紹介

ウルトラ音楽術 冬木透、青山通

インターナショナル新書 集英社

「ウルトラセブンに詳しい方は『冬木透は、本名でキリスト教の有名な讚美歌を書いている』と聞くと意外に思われるようですが、いっぽうキリスト教関連の方は『蒔田先生はペンネームでウルトラセブンのテーマ曲を書いている』と聞いて驚いているそうです」(162頁)。筆者も、愛唱している「ガリラヤの風かおる丘で」(183)の作曲者である蒔田尚昊^{まいたしやうこう}が、冬木透というペンネームでウルトラセブンで音楽監督の役割を担っていたと聞いて、大層驚いた一人です。同時にウルトラセブンのストーリー、音楽、メカすべてに統一感のある優れた世界観と、あの讚美歌の自然で揺るぎない完成度の高さが結びついて、大いに納得させられもしました。

本書には冬木透・蒔田尚昊の満州での幼少期の原体験から、讚美歌との出会い、エリザベト音楽院での学び、そしてウルトラセブンという優れた作品との関わり、さらには好きな音楽から作曲時に考えることまで、様々なトピックが詰め込まれています。讚美歌について割かれている誌面は決して多くありませんが、国民的な作曲家の讚美歌にまつわるエピソードはどれも創作の本質に関わる興味深いものです。本書に記されている著者の職人的な創作へのこだわりの深さと、それが求められ生かされてきた現場のあり様は、創作に携わる者に多くの示唆を与えてくれるでしょう。書名は二重の意味で内容を良く表していました。



会計報告

2021年4月～2022年3月

■収入の部■

科 目	2021 年度予算	2021 年度決算
会員負担金	1,060,000	1,189,000
(正会員)	(750,000)	(750,000)
(準会員)	(60,000)	(60,000)
(賛助会員)	(250,000)	(379,000)
自由献金	450,000	353,000
積立金取り崩し	100,000	0
特別収入	0	170,601
その他	0	2
当年度収入合計 (A)	1,610,000	1,712,603
前年度繰越金	1,419,062	1,419,062
収入合計 (B)	3,029,062	3,131,665

■支出の部■

科 目	2021 年度予算	2021 年度決算
理事会費	54,000	30,274
委員会費	270,000	35,585
人件費	480,000	390,000
事務費	264,500	162,605
ジャーナル発行費	180,000	109,854
カンファレンス開催費	100,000	70,000
総会開催費	15,000	0
JEA 関係費	90,000	52,000
経常支出合計	1,453,500	850,318
特別支出 積立金	100,000	100,000
予備費	132,500	0
当年度支出合計 (C)	1,686,000	950,318
当年度収支差額 (A) - (C)	-76,000	762,285
繰越額/残高 (B) - (C)	1,343,062	2,181,347

●賛助会費納入者・献金者一覧 (2021年4月～2022年3月)

個人: 斉藤真木子、菅原早樹、山村雅彦、本間昭弘、石川岩夫、林慎一郎・頼子、中山信児、田近喜恵子、森本範博、中山啓子、高橋和江、南場安正、横倉知恵、倉富隆子、安西仁美、金谷郁子、福田崇、藤本侃也、李俊昊、匿名 (20件)

教会: キリスト教朝顔教会、都賀キリスト教会、下北沢聖書教会、結城福音キリスト教会、上作延キリスト教会、千歳烏山光の子聖書教会、グレースコミュニティ、インマヌエル武蔵村山田園教会、登戸教会、菅生キリスト教会、インマヌエル富士見台教会、武蔵台キリスト福音教会、札幌希望の丘教会、泉キリスト教会、インマヌエル松戸キリスト教会、前橋キリスト教会、橋本キリスト教会、インマヌエル板橋キリスト教会、世田谷中央教会、日本福音キリスト教会連合 (20件)

お名前の掲載を希望されない場合は、通信欄に匿名希望とお書きくださるか、メール (info@jeacs.org) で、その旨をお知らせください。

夏のご挨拶と献金のお願い

新しい歌を主に歌え。喜びの叫びとともに巧みに弦をかき鳴らせ。 詩篇 33 篇 3 節

主にある皆さま

聖い主の御名を讃美いたします。

いつも福音讃美歌協会のためにお祈りとご支援をいただき感謝します。

前号でお知らせしました『教会福音讃美歌 奏楽音源 USB メモリ』は、製造工程でのトラブルのために発売が遅れましたが、8月入荷の目処が立ちました。お申し込みいただいた皆様にはご迷惑をおかけいたしました。誌面を借りてお詫び申し上げます。なお、会員特価の申込みは8月末まで延長しましたので、まだお申し込みでない方はこの機会にぜひお申し込みください。

昨年は「讃美歌詞と讃美歌創作」のテーマで「福音讃美歌 WEB セミナー」を2回行いました。大勢の方でご参加と作品公募への応募をいただき感謝いたします。今年は「讃美歌の作曲」というテーマでWEBセミナーを開催しております。第1回セミナーは6月4日に作曲家の遠藤稔さんとLYREの宮脇栄子さんをゲストにお迎えして開催されました。今回は讃美の曲を公募しており、すでに数名の方が作品を送ってくださっています。第二回セミナーは10月1日(土)に行われます。セミナーの様子は、今年の2回のセミナーも含めJEACSの[YouTube](#)チャンネルでご覧いただけます。

小歌集『あたらしい歌3』についても、年度内の完成を目指して作業を進めています。

最後になりましたが、6月に開かれた社員総会において、李俊昊牧師が新理事長に就任いたしました。皆様のお祈りとご支援を心からお願い申し上げます。

福音讃美歌協会の働きはすべて、皆様の祈りと献金によって支えられています。また、正会員、準会員、賛助会員としてお支えくださる方々も引き続き募っております。ぜひご検討ください(詳細は[こちら](#))。皆さまの上に主からの豊かな祝福をお祈りいたします。

福音讃美歌協会

◆郵便振替口座◆

番号 00220-1-95127
名称 福音讃美歌協会

◆ゆうちょ銀行口座◆

〇一八店 普通 7252410
一般社団法人 福音讃美歌協会

■福音讃美歌協会 ◆賛助会員募集

- ・「賛助会員」は、福音讃美歌協会の趣旨に賛同し、支援して下さる教会や個人の会員です。
- ・賛助会員のお申し込みは、福音讃美歌協会までメールかFAXで入会申込書をご請求ください。
- ・賛助会員の年会費は、一口5,000円で、個人は一口から、教会は二口からでお願いします。
- ・正会員、準会員の詳細については、福音讃美歌協会まで直接お問い合わせください。



福音讃美歌協会 (JEACS)

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCCビル 602号室
Tel.03-5341-6920 Fax.03-5341-6921 (いのちのことば社出版事業部内)
ホームページ <http://jeacs.org/> メール info@jeacs.org
Facebook YouTube